墓堀りの人たち

鬱蝉　せみこ

『墓掘りなどをする者には「死」などという事はちっとも怖ろしくないのです』

アナトール・フランス『聖餐祭』より

（訳　岡本綺堂）

第一幕

1　エリサ

今日も、古本屋の中に積んできた本のように、そこかしこに、どこでも積み重ねてきた、バラバラに堆く積もった屍の小山が景色を作る。

ニュアンスに溢れている彩色。死色の、巨匠の絵。

力尽きながらも、私は完成した穴を確認する。３０メートルほどの広さだ。

深い、暗闇にしか彩られぬ穴の淵が、ここにある。向こうには、数えられぬほど重なった、骸の山々がある。穴の容積と死骸の量を目算して判断する。

よし。この穴の大きさは、これで十分だろう。

シャベルを投げ捨てて、振り向く。そこには、バイオレットさんがいた。

「穴を彫り終わったんだ。早速、死体を中に捨てよう」

不思議な顔をしているときと、引き締まった、真剣な顔をしているときのあるバイオレットさんが、今は「真剣顔モード」でいた。目にかかった、長く、きちんと結ばれた淡い色の髪を顔の片側にゆらりと払い、奇妙な香りを漂わせ、暗い顔で私の前に来た。

彼女も穴を測った。私の能力を疑っているわけじゃない。そういう段取りになっているからだ。それだけ油断禁物な仕事なのだ。

髪がかかっていない側から横顔を見る。なんと魅力的な顔立ちなんだろう。だがそんな考えも所詮、毎日こんな仕事が続く、非情な日常の中では、儚い考えだ。
まぁ、彼女のそっけない態度と比べれば、夢想力は何でもなさそうだね。私より何倍この仕事に向いている人なんだから。
改めて確認し終えた穴と、死体の塊をよく見比べてから、バイオレットは私の方へと振り向き、
「これから交代しましょう。エリサさん疲れているでしょう？　あたしに任せて」
と、いつもの無情な声で言った。
だがあいにく、いくら疲れても、私は仕事の途中で引き上げる気はない。冷たい空気の中で汗をかくのはあまりに目立ちすぎて疲れているという真実がバレてしまうので、全力で呼吸を強く保って、シャベルを手に偉そうな格好をした。
「これぐらいで、私が膝をつくはずがないのよ。あの程度のことは、私にとって鍛錬の一環に過ぎないの」
明らかに強がり。でも、これでなんか願望が通じたのだろう、
「あぁ、そう。ならいいですわ。」
と、バイオレットさんが微笑みを浮かべる。貴重なものだ。嬉しい。
私もまた笑顔を作って（疲れを繕う作り笑いと言っても、嬉しいのは本当だ）、二人で一緒に死体を穴の中に運び始める。
冷え切った空気の中、温かい、甘い匂いのする風が吹いている。靡いているバイオレットさんの髪を梳いて、更に尊いアネモネの香りの加わった、死の細菌を運ぶその風を、私はいっぱい吸い込んだ。
なにせ、私達は無敵だ。世界の最後の生き残りになるかもしれない。だから私達には、義務がある。
蔓延する黒死病に命が刈られた人たちに、ふさわしい埋骨を。

2　バイオレット

数時間かけて、あたしたちは死体の全部をきちんと穴の中に放り込み、醜さのあまりに埋もれたそれを塞げ、最後に忘れた死体がどこにもないかを改めて確認してから、地獄に等しいその場所をやっと離れた。
その前に、あたしたちはちゃんと香水をつけて、村ほどの規模もある大きな墓場を、言葉では伝えられない夢らしい匂いで満たした。冷たい空気の中にスミレの雨や万能の香りが広がって、憂い温かみが生じた。
仕事をやっている間、苦しむエリサちゃんの顔を見ずにはいられなかった。
墓掘りの人だから、黒死病に罹る人の心の中に現れる黒い渦巻きなど、当然生じるわけもない。あるわけない。ただの心配性だわ。
でも、その苦労する姿を見る度に、怖い。
思いがけず黒死病の烙印がエリサちゃんの中に現れたとしたら、どうしようか？　誰に救いを乞うのか？
神に？
ただ、この世界に神なんているとしても、あの人はクズの中のクズだろう。祈るべきものではないでしょうね。まあ、そもそもいないのだけど。
所詮神などいないのだけど、帰ろうとする度に、疲れ切った自らの肉体を顧みずに、毎回あの、香りや花でいっぱいの変な儀式を行うことは、あたしたち聖なる「墓掘りの人」の使命なのだ。「墓掘り」といっても、私達はやっぱり「労働者巫女」の扱いなんじゃないか。
あ、すごい言葉だ、これ。「労働者巫女」。好きだな。遠い昔、「旧世界」には、労働者が労働組合というものにも参加していたらしい。この世界にはないけど。惜しい。
黒死病（ペスト）と戦う巫女たちのための組合。素敵な響きじゃない？
……私達はそもそも労働者でも巫女でもないので、ありえない話だけど。ただの現実逃避だ。
それにしても、死体を土葬しないといけないルールは不合理ではないか？　黒死病流行の対策には、死体をすべて燃やすほうが合理的ではないか？　それなのに、あんなバカバカしい、呪術めいた儀式まで行わないといけない。
感染性は温度とかかりがあり、大規模に火を点けるのは危険すぎると言われても、そんなの口実じゃない？　そもそも香水や花儀式が疫病の広がりを抑制するなんて、根拠のない話だよ？
とりあえず、城に帰るまでに別のグループとの合流ポイントがある。この場所に向かって、あたしたちは今「世界の果て」に沿って進んでいる。こうすれば、両グループが互いに見つかりやすい。
「世界の果て」。真っ白い、果てしのない、どこまでも虚無が広がるかのように見える、不可思議な谷。その端に立っていても、ただ淵のない深淵が見えるだけ。すぐ前に広がるのは、水平線のない、果てしのない空白だ。

この果てには何があるのか、目では見えない。叢雲に隠れている。だから、「世界の果て」と呼ばれている。
初めてこの国に赴任された時、ここに来るのが怖かった。この深淵の向こうに何があるか、想像するとたまらなかった。でも今は平気。あまり考えないように、仕事に集中するに限る。
でないと、死ぬわ。

冷たい空気に堪えるため、エリサちゃんの腕を掴みたいと思ったが、やっぱりやめたほうがいいと思いなおす。余計な負担になる。いくらでも隠そうとしても、疲労がすごく溜まったのはすぐに分かる。動くのすら辛そうだ。無理もない、今朝4時から穴を掘って死体を探して村をくまなく歩き回って……キリがなかったみたい。それに、生き残りが一人もなかったのはあまりにショックだっただろう。
「世界の果て」を片目で眺める。温かくて生々しい、落ち着かない匂いが鼻をつく。無数の香りが蔓延する儀式の区域から、もう離れてきた。ここから、鮮やかな死の世界のみ。
そして、派手に汗ばむエリサちゃんの姿があたしの側にいる。
感情を殺し、無視した。
助けたいのに。怖いのに。抱きしめたいのに。
あたし、あの人に届かない。
どこまでも届かないその人は、やはり手の届かない白亜の水平線を、心ここにあらずの様子で眺めている。
ぼんやりと、美しく靡く、エリサちゃんの長い、黄金の髪を見て思いをはせる。
のどかな風に混じった、エリサちゃんを思わせる香りがあたしに届いているんだ。ヒヤシンスの花が頭をよぎる。
エリサの蜜が私に届くのに、自分のが届かぬのが悔しい。

3　エリサ

仕事が終わってから1時間ほど。
「世界の果て」にある村の近くで合流しよう、という伝言に従って、私とバイオレットはユウナたちと合流した。
ユウナは相変わらず掴めない顔をして、冷酷に巡回の報告を告げた。数十の死者が発見されていて、適当に墓を掘れば埋められる程度だとのことだ。村の住人をまるごと埋めないといけないという使命に比べれば、そんな仕事はただの検察に過ぎず、気軽な戯れにさえ見える。
すぐそばにいる、教会組織に管理される中央大学から派遣された、オレンジ色のマントを纏ったあの新人のほうが心配だ。司令官が人手不足になって、官僚の補いとして派遣されたらしい。すごく神経質な顔して、恐る恐る声を上げている。不安に囚われている様子がミエミエだった。おもわず同情したくなる。とはいえ、使命を忠実に果たしたことは、割と尊敬している。黒死病に無敵である私達と比べれば、彼はやはり危険に晒されている。なのに巡回を真面目にやり遂げた。
「それで、そちらはどう？　ビデヴールという村がやはり？」
「まぁ、一応。生き残りは一人たりとも見つからなかった。なんとか力を尽くして、全員を葬ったんだけど、」
報告を進めようと思ったが、バイオレットが自分の声を遮って、「詳細は後で説明するわ」と報告の流れを止めた。あぁそうか、思ったより彼女も疲れてるんだ。急ぎたいのかな。どれほど無神経なんだ、私は。
嫌だ。私はいつもバイオレットの負担になってしまっている気がする。

早めに報告を終え、疲れ切った顔で城に帰ることにした。あれほどの死体を目の当たりにするのは、いつぶりだろう。
多分、一ヶ月？　二ヶ月？
否、――イエヴ県の件もあったな。結局一週間しか空いていない。
今日は早めに寝たい。

4　シモン・エヴェント

今日はショックのあまり、声が掠れて話すのすら怖くなったんです。
話せば死ぬ、というような曖昧な迷信に襲われています。
そして、墓掘りの人をみて、その人たちがやはり人ではないと、思ってしまいました。
何だ、あの真剣な面持ちは？　いくら慣れていても、人の死を前にしてあんなに無感情な有様では、もう人間ではないと言ってもいいでしょう。
とても怖い体験でした。
ですが、仕方がありません。なにせ、この国が死んで

ゆくんです。でも、教団大学の一員として知っているその恐ろしい真実を、死んでゆく国に住んでいる人たちに言えるはずがありません。誰にも言えません。

墓掘りの人たちは知っているのか？　知っていると思ったんですが、その話題は触れるべからざるものだ。そちらにも、知るすべがない。使命をやり遂げるしかありません。

だが、そうなると、やはりその国に住んでいる人たちに対して罪悪感がないわけがありません。何も知らずに死んでいるとは、あまりに残酷です。「無知こそ至福そのもの」という言葉は、僕から見ればただの詭弁です。誰もが真実を知りたいのです。真実を恐れて自分を騙し、知りたくないふりをしても、必ず心のどこかに「知りたい」という本心が隠れているんです。

何故なら、僕たち「人間」は好奇心旺盛だからです。記載されぬ地を知り、まだ発見されていない、知的な分野の真実を突き止め、成長し、文化や文明を立てる……それは他ならぬ人類の本能だと思わざるを得ません。

でも、この国に入った時、驚きました。黒死病にこれほどやられる国があるとは、想像できませんでした。

そしてその上、人たちはどんどん大人しくなって、ただ死が迎えるのをじっと待っています。希望や欲望、羨望や願望を絶望にし、一滴の人間の尊厳すら失い……それは、人間の有様ではないといいたい。ですが、私はもし、この国に生まれてきたのであれば、どうなったのでしょうか？

家族の皆を次々に亡くし、宗教的な道理を机上の空論と見なすようになってしまい、命の価値に失望し、引き換えの価値を見つけられず、ただ死を睨むだけ……。

そんな風に人間が生きることが、許されるとでも言えるのか？

それを許したのが天罰だというのなら、その天のどこに正統性があるのですか？

この国に到着してから、一週間が経ちました。ですが、これまで見てきたその神の修羅場に、一週間にしてもう耐えられない。あんまりです。もちろん、そんな世界は「神」のせいにしても、神の力を超える病から生まれてきたものなのだと、僕は十分知っています。

だが、それを認められるわけがないです。

城の、司令室にいます。司令室と言っても、ただの個人の事務室にしか見えません。洋風の飾りが、石造りの古い、無色で無慈悲なその城の壁を彩っています。この国には現実感が薄すぎるといっても過言ではない。電源ケーブルがあちこち部屋の中で見られるのは、電灯とともに時代を思い出させる唯一のものです。

何故なのでしょうか。これもまた、対策としての節約の一環なのでしょうか？

僕の前に、墓掘りの三人が並んでいます。敬礼して、司令に報告します。

臨時司令のアルベルトさんが、僕が到着した日と同じように、感情などを一片とも顕にせず、ものすごい厳しい顔をしています。この人が感情を持っているかすら疑わしいぐらいです。

しかし、そういえばさっきの墓掘りさんも同じでした。ユウナさん、といいましたっけ？

一日中村々の中を見て回ったというその人も、顔に感情を窺わせる動きが一つもなかったです。ただ、忠実に使命を果たし、窓の前で住人の名前を大声で叫んで、２分待って答えがなければ強引に中に入って、そして何気なく死体を発見して、死を確認してノートを取って、更に何もなかったかのように村の外に穴を掘って、中に名もなき死者を捨てて…

いつも、顔色を変えずに。

日常、だからでしょうか？

あの人に比べ、僕はドアにノックする際、体全身が震えて、力なく、弱い声しか出せなくて、中に入る勇気をかろうじて奮い立たせて……

情けないことだ。

それとも、もしかして僕はまだ人間的すぎるのでしょうか？

いずれ、僕もあの人達のように、無感情になり、生死の差異すらないような、命の価値の軽い身になるのでしょうか？

その三人の背中を、じっと見ます。

冷酷に、報告する三つ揃いの背中。

今日は、３００以上の死体確認できそうだ、と述べている声が遠ざかる。

非現実な感覚が体に走りました。

そして、声に似つかわしき態度や顔で、僕の横を通って部屋から出ました。

部屋の中には、僕とアルベルトさん二人だけ。

「辛かったな」

いつもどおりの、傲岸不遜の態度で話しかけるアルベルトさんの声でした。

ただ、私は非現実感のあまり、はじめよく聞こえなませんでした。

「おい、聞こえるか？」
罵る声で、現実に戻りました。
「申し訳ございません。感傷的な、無意味な考え事をしてしまいました」
思わず敬礼しましたが、プライベートな場面でそんなものはいらないので恥ずかしくて体の姿勢を直しました。
アルベルトさんが苦笑しそうな動きを見せた気がしたんですが、さすがにすぐに引き締めた顔に戻りました。まぁ、無理もありません。
「司令。失礼ながら言わせていただきますが、私はこの国の管理について疑問があります」
「なんの疑問であるか？」
「私は、何故村人をそこまで苦しめる必要があるのか、理解できません。今、生き残りの人口の約７０％が健康証明書をもっている模様です。そういう人達がこの国に残っているのに、本部はなぜ強引に退去させないのか、私にはわかりません」
「いかにも。その状況は私だけの判断ではないのだから。それは、神からの命令だからな」
「神と仰っても、それは人間に対する態度としてはあまりにも残酷すぎると思います。私達は神の沙汰ではない上で、命令に従う中でも、可能な限り最も合理的な方法で命を最大限に救うべきだと愚考いたします」
「大胆だな。だが君は自分の立場を弁えればいい。『神』がその言葉を不満に思えば、ただではすまない。私は、何があっても『神』の命令に従い、その言葉に潜んでいる究極の知恵を信じ、計画は必ず実行する。それは人間ならではの態度だ。わかったか？」
「はい、わかりました。失礼いたしました」
「まあ、そんなに固くならないでもよい。私は構わない。任務が極めて難しいのはわかっている以上、上下関係の中で弱みを見出せるのもある程度許されるものだ。ただ、油断は禁物だ。いつ黒死病に襲われるのか、わかったものではないのだから」
アルベルトさんは正しいです。そもそも、「神」の概念を知っている人たちにとっては、「神」という名は述べるべきものではありません。形すら知られていない、何処にも有り、「神」という名の不思議な、毎日の秘跡――そう伝えられています。
形が分からない反面、その力は圧倒的であり、その存在は証明されていると教えられていました。というわけで、名前すら、否、「その存在に対応するイメージを思い浮かべながら名を唱える」などは極めて危険です。
ただ、この国の状況は、いくら教会組織と政治機関に命じられているとはいえ、やりすぎだと思わずにはいられません。命の価値はそんな軽いものではありません。
「あぁ、気持ちはわからないわけでもない。ただ、私達は上の命令に従う事しか出来ない。神秘の印の焼き付いた言葉であれば、尚更だ。」
アルベルトさんは窓の外へ覗いて、いつもの厳しい顔で広がる国を見下ろしています。

この人達は、どうしてこんなに冷静にいられるんでしょう？
毎日、数百人が死んでいます。僕と司令官しか知らない情報なのですが、今や全国の人口は元の３０％以下にまで低下しました。この国に黒死病が現れてから、１０年が経ちました。急速度で広がる感染が、ほんの数月のうちに生き残りの全員を全滅させる可能性もあります。
僕はそれを止めるべく、研修としてここを志願しました。それなのに何もしないで、ただ巡回を繰り返して死者の認証を重ねてゆけという命令など、想像しませんでした。
それを認めたくありません。でも、如何にして逆らえるのでしょうか？
挨拶を済ませて、内心で苦悶しながら部屋から出ました。

5　祐奈

お城の東塔の最上階に、私達の寝室がある。
飾りは地味だけど、窓から彼方が見えるのはいいポイントだ……と最初は思った。窓から見える村に一つずつ行き、ただ受動的に住人の死亡を確認して、葬った村を寝る前に再見するのは、鬱陶しいかぎりだ。悪趣味の極まり。
神々がいれば、大笑いしている狂人のはずだ。

この国は不思議だ。
一年前、ここに墓掘りとして派遣された時から、そう思った。
この国と無縁であるバイオレットでも、ショックを受けたみたい。彼女はめったに感情をあらわにしないが、察することぐらいは出来る。最初に比べれば、今の顔はより冷静になった。そして、エリサに頼ることで、その穏やかな顔を保ちえていた。
でもそれだけで心配だ。メンタル面では、エリサはもう限界みたい。この国の出身者だから、私達三人の中で

は一番つらいのは紛れもなく彼女だろう。なのに、一番強がって、先に行って、熱心に仕事をして……それは、自分の弱さを忘れるべく、仕事に熱中するというやつじゃない？

私にはあまりわからない。三人の中で、「直感」が一番鈍いのは私だ。他の人の心を観られない。バイオレットみたいに、一目でいくら黒死病が近づいているのかを言えるのは、私から見れば魔法みたいなものだ。

「墓掘り」と言っても、私達はやはり普通の人と全然違わない。ただ、謎の理由で黒死病に罹らないと見込まれており、前線に送られた戦士みたいに黒死病でやられっぱなしの国に派遣されて、死体を葬るだけだ。

私は、小さいころから墓掘りの素質が見込まれていたため、８歳からそれをやっていた。人生のほとんどすべての時間を、死と接して、生命より死の傍にいた気がする。

でも、この国だけは、別だ。人生で初めて、これほど酷い状態にある国を見た。想像しなかった。住人はほとんど皆、次第に消えていくんだ。全村がゴーストタウンになってしまう。何があったのだろうか？

黒死病が進化したとでもいうのだろうか？　しかし、不思議とこの国から外に広がることはないようだ。まぁ、それは原則によれば当たり前のことだ。黒死病は通常、国の境界から出られないのだ。でも、この伝染規模では、他国に移ってしまったとしてもびっくりするものではないと考えられていた。

幸い、そうはならなかった。でもそれに引き換え、この国はもう死んでいる状態だ。

高温度や悪臭が伝染病を蔓延させると思われているため、街のほとんど全ての電灯が消されて、夜は真っ黒だ。昼でさえ、勢いを失った街の中では、呼吸する人が一人も見えないその日常が、誰もいない世界のイメージを思い浮かばせるのは当然だ。

だが今は、人が消える件についてちょっとだけ気になる。死体を発見できず、ただ家から消えた人が多い。でも国境にも姿が見られない以上、亡命しなかったのは確かだ。どこに消えたのか？　これは神隠しなのだろうか？

私にしても、辛い。早く終わらせたいが、一年間こんな有様だ。

何故だろう。

寝室が別々な以上、バイオレットやエリサの姿は直接見えないが、呼吸を聞くにおそらく寝ているみたいだ。私だけが、考え事に耽っている。

ベッドの中に寝転んで、何も考えないように、考えないように…

そして、今日の少年を…シモン、だったかな？思い出す。

あの人は、ごく普通な人だった。二十歳を超えていないようだ。こんな危険なところに、普遍にして全世界の教会大学が一般人を送るだろうか？

多分、研修記録を取るために来たのだろう。確かに、彼は「官僚の不足に加え、危険なところで誰も願望せずにいたので、ここを研修として志願した」と言っていたな。でも、研修といってもこの国はやはり危険すぎるのでは？　やはり他の目的があるのではないのだろうか？

情けない話だが、教会組織の中央機関が何も知らないとはやはり思えない。もちろん、そんなのは陰謀論だと見なされてしまうかもしれない。だから何も言わない。

でも、こんなに死者が出ているのに、数年間あの小僧以外に誰も派遣せず、国をまるごとに死なしめるとは？意図的ではないとは考えにくいものだけど。

だからあの少年には仕事に付き合ってもらった。でも、何も言わなかった。怖い顔を作って、本題に入ると直ぐに誤魔化すんだ。必ず何かを知っているんだ。それを突き止めてみせる。必ず。

ところで、皆の呼吸が静まったというのに、私はまだ落ち着かず、眠れない状態だ。

寝よう。

第二幕

1　エリサ

機械的に手を動かし、作った穴になんとなく死体を捨てる。

一年間の、いつもの、毎日毎日、繰り返された動き。

意味のない動き。

目的のない、飾りにしかない、儀式とも呼べない、大規模な葬儀。

今日も一つの村が消えたそうだ。前の件と同じで、ほとんど全員が前触れなく家の中に倒れていた。人口の２０％ぐらいは、跡形もなく消えて何処にも見つけられない。何処に消えるのか、誰にも質問することはできない。誰も知らない、とだけ言われている。神隠しが多いな、最近は。全世界に流行る、神隠しマニア。

よくあるパターンだ。実際、ビデゥールの件以来で、もう６回目になる。割合は次第に増加する傾向にある。それと並行して、仕事の激しさが急に上がったんだ。もうのんびりする暇はない。

私の直ぐ側に、バイオレットさんがいる。彼女がいなかったらどうしようと、時々思う。寡黙なユウナさんと比べれば、励ましの言葉も多い。話しづらいと言っても人間らしさがそこそこある。考えていることはさっぱりわからないが、意外と他人に思いやりのある人だ。

ユウナさんもここにいたが、香水の風船を取りに行って今はいない。これを済ませて、今日はお終いだ。休みが欲しい。

ビデゥールの件以来、１５日が経った。

因みに、ビデゥールは子供の時よく遊びに行った村だった。

あの日、その事をあまり考えなかった。今から見れば、あまりに変だ。どうしてそんな大切な思い出を忘れるのだろう？

仕事に熱中して、危機感にあふれているあの状態の下で、忘れてしまったのか？　そんな状態になると、人間は儚いものを簡単に忘れられると言われている。確かに、翌日に目醒めた時、説明できない不安が体に走った。

あの日、知らないうちに数多くの私が知っている人を埋め捨てたんだ。簡単に。何も考えずに。命令に従って。

本当にショックだったのは、この仕事を何気もなくやり遂げた私ではない。一日中、自分にとってこの村がどれほどの価値があるかを忘れてしまった私の方を、本当に恐ろしく思った。

自分を、忘れてしまう。私にとって大切なもの。思い出も、愛しいものも、欲しいものも。空っぽになってしまうんだ。

でも、私はここに居る理由がある。昔の知り合いを守れなくても、せめて何があっても家族や友達を守り抜く。

アルベルトさんから、家族の安全がその危険な仕事の代わりに保証された。

最初は、私がその変な力で生まれてきたという特権だけで自分の家族が護られているなんて、気持ち悪いと思った。でも一ヶ月二ヶ月が経って、どれほど恵まれていたのかを理解した。

でも、２週間前、ふと思った。思ってしまったんだ。

よぎるべからざるものが、はっきりと頭に浮かんだ。

結局、最後に家族から連絡を受けたのは、いつだっただろうか？

思い出せる限り、この国に入ったばかりの時だった。会うこともできず、ただ電話だけがあった。

そして、遠い場所に連れていかれて、ただ使命を果たすように命じられた。

確かに、今まではその話を鵜呑みにしていた。でも、黙ってビデゥールの村を埋めてから、恐ろしい可能性がわかってきたんだ。

あれが、真実であるという証拠はどこにもない。

多分、アルベルトさんや中央機関の作り話に過ぎず、私を絶望をさせないため、そして仕事に就かせて精神的な面で自分を守るための、詐欺話なのではないか？

一年間弱、その可能性を考えることもなかった。

でも一旦考えてしまえば、もう遅い。考えずにはいられない。

そして、それ以来まともに仕事をやるのは難しくなった気がする。

この国はもう死んでいるといえばいい。なのに、墓掘りの私達は無駄にここで働いて、死体を無闇に重ねて、一つ一つの骸を綺麗に香水で清浄しろと言われる。まるで、人ではなく国そのものを葬れと言わんばかりに。なんのために？　皆死んでゆくだけなのに、何か隠されている事があるのだろうか？

もしかすると、目的の中には私達墓掘りたちも含まれているのか？

黒死病に無敵だと言っても、所詮私達は人間だ。張り切って死体の山の中に無駄に体を働かせるのは、精神面でも物理面でも疲労の極みだ。何時までこんな感じでいられるのだろうか？　最後には、この国と一緒に葬られる運命なのではないのか？

疑問を拭いきれぬままに、死体を捨て続けていた。

2　祐奈

結局、もう一つの村がきょう地上から消えた。もう何番目なんだかわからない。いつものことになっていた。

いつものように、二人組（今回はエリサとバイオレット）のうち一人が穴を掘っている間に、もう一人は香水で満たされた風船を城から持ってきて、いつものようにその風船を遠隔措置で爆破させて、満開の花の香りを死の平原に開放させ、いつもと同じ、いい匂いを背にしてそこから撤退する。これは、日常だ。ごく普通な、この国にあっての日常だ。

そういえば、シモンという少年が来たのは幸いだ。数週間で香水が足りなくなり、もうその巨大な風船を使わないようになっていたが、彼のおかげで、香水がいっぱい作られるようになり、死に浸る町を、安全なやり方でいい香りで祝福してふさわしい葬儀ができる。

でなければ、この状態を制御することはできなかっただろう。良かったね、沢山の素敵な匂いがする屍を、地の下で舞い踊らせることができるよ。めでたしめでたし。

前に、この国は地獄だと思った。だが甘かった。

この国、遥かに地獄を超えている。

地獄さえあれば、せめて死のあとで何かがあることがわかるんだ。

だが、この状態では、周りの皆が死んでゆくなかで「死の後に何かあるのか」というはてなマークはずっとそのままだ。絶命の瞬間まで。

もう城の周りの村も無人になってゆく。人が死ぬか、消えるか、とりあえずこの場所から離れていき、そのあとに無人の巨大な町を構築するんだ。意図的ではないにせよ、生き残る私達に対してあまり礼儀正しくはない。

城への帰り道の途中で、エリサとバイオレットの状態を観察した。

案の定、あまり良い状態ではなさそう。

バイオレットが疲れ切って最近せっかちになりがちで、表情ももはや隠さなくなっていたことはまだいいが、エリサの具合の方はより深刻に見える。

顔が優れないだけでなく、もう強がるのは無理だと悟ったか、感情を完全に顕にして、ほとんど毎秒、汗を掻いているのだ。それを見て、正直なところ憐憫の情を抑えきれなかった。

ああ、いつまでこの状況が続くのだろうか？

3　シモン

今日も資料をまとめ、恐ろしい数字を見て驚愕と恐怖を抑えられなかったです。

現在、元々巡回などの仕事が使命の一環であったというのに、普通の人間には危険すぎると本部に判断されたため、僕は官僚らしい仕事に専念するように命令されました。言い換えれば、資料ばかりです。

命には危険がないけれど、その国についての実の数字を自分の目で見ると、やはり思わず唾をのみます。

それに、城から出ていないと言っても、その数字を見て恐怖がないわけがない。僕が想像した悪い状態を遥かに超えて、何人の死者が出ているのか、毎週いくつの村が消えたのか、それらをその国に住む誰よりも理解していて、確実に確認し、真実を把握できる唯一の人となりました。

だから、僕も時々、この国に来たことに後悔することがあります。

アルベルトさんとの関係もあまり芳しくないと言っていい。厳しい顔が相も変わらず、本題を避けて、頑固に促す僕を叱って、上官としての仕事をやっているんです。人が沢山死んでいるのに、無情な声で命令を下すその表情は、やっぱり頭にくる。

でも、従わなければ生き残れないことは結局のところ事実ですし、黙って従う身だけです。

命一つたりとも救えず…

今日も、その話についてアルベルトさんと言い争いをしました。でも、

「君は何もわかっていないんだ。小僧以外の何物でもない。いずれ解るよ。この緊急事態を乗り越えたいのなら、黙って命令に従えば良い」

「ですが、お言葉の正しさになんの疑いも持ってはいませんが、失礼ながら、人が死んでいるのですよ！　これは上下関係などよりも大切な、生死を決める問題でございます！」

「それは黒死病との戦いに身を委ねた、否、「神」が触った土で戦いに向かったた全ての人の定めにほかならぬのだ。教会組織であっても軍事であっても、官僚すらであっても、なんの違いもない。戦争と等しい状態なのだ。戦士として振る舞え、さもなくば死ぬぞ」

いつも偉そうな格好をして、僕が言おうとしたことを幼稚な詭弁として扱い、咄嗟に手で振り払って……それはいつものアルベルトさんの言葉です。

ただ、それではあまりに納得できません。このままでは、皆死にます。住人がたった二人になった国など、とんでもない話です。見たくもありません。

「賑やかな議論の中で突入してすまないが、儂はアルベルト殿と用事があって…」

突然、朗らかで強い、遠くまで届かれる声が室内に響きました。

僕が振り向くと、一人の、中年の男性が前触れなくドアの前に現れました。

多分に太った体は、僕にとって非常に背が高く見えます。言い換えれば、巨漢という言葉しか頭に浮かびません。

それに、すごく深い瞳で、別世界を見ているとと言えるほど遠方を睨んでいるその目つきは、気高い存在である印のようなものでした。

声は特に高くて印象深いです。

「申し訳ございません、ドレミエン様。お越しになるのは存じておりませんでし、うっかりして……」

「それには気にするに及ばない。それより、人前ではできるだけその改まった態度を直してほしいがね……」

「はい、もったいないお言葉でございます」

魅せられる、雄弁家の大声。

一瞬前、ディスカッションの中心であった僕は、完全にこの場所から消えたかのようです。この巨人と比べれば、僕は明らかに存在感の点で劣ります。

「シモン殿、君はもうことが終わったのなら、ここから去るがよい。私はこの人と大事な話があら」

押しのけられた僕には、悔やむ気持ちが確かにあるけれど、あの人に魅せられずにはいられません。何故でしょう。

スカーフを翻すその人は、マントを脱ぎました。無意識に目が会います。恥ずかしくて、輝く笑みを作るそのジャイアントの目線から姿を消しました。

この人は、初めて見ました。誰なのでしょうか。偉い人に見えます。だが、ここに普段から、司令官の許可を待たずにいつでも城に入れる偉い人がいたなんて、今まで読んだ資料の中では聞いたことがないです。

あの人は、一体誰ですか？

事務室から出るところで、廊下でユウナさんに会いました。おそらく報告するために来ました。

「今日はお一人ですか？」

僕は問いました。そういえば、あの時以来、話す機会があまりなかった気がします……

「ええ。エリサは体調が優れぬようで、休憩を取るべくバイオレットと一緒に個室に戻りました」

改まった話し方。冷たい眼、引き締まった口。ある程度、アルベルトと似た様子ですが、若さのためか、あのお爺さんと比べて心が読めます。判然としない部分もまだいっぱいありますが。

「そういえば、シモン殿、二週間のうちに数十の村の人々が完全に消えたことは、ご存知ですか？」

「あ、知っています」

何か、少しばかり怪訝そうに見えます。何か疑っていそうです。

「そう、ご存知でしたか。なら話が早いです。アルベルトさんとの会話を折に、死体が発見された死者と死体が消えた死者の割合がほしいという話が出たのですが…」

台詞が読まれるみたいに、言い回しがあまりに変に聞こえます。

「それは、えぇと、なにかの間違いではないでしょうか？『死者』と言い切るのはまだ早いです。ただ消えるたのみで、その人達が死んだと決めるには、まだ情報不足です」

「む、そうでしたっけ…」

更に怪訝な顔をするユウナさん。

「ひょっとして、ユウナさんは私が知らない情報をお持ちだとでも……？」

目をそらすユウナさんの姿。答えるのが惜しいようです。僕が続ければいいかな？

「それに、えぇと、資料に関しては、臨機司令官の直接の命令を受けない限りお見せすることなどは出来ませんが、まぁ、一応その内容を務めの一環として大枠で教えることは不可能ではないと思います……えぇと……」

何を言えばいいのかわからないまま、先に進めなくなりました。それを見てユウナさんは不敵に微笑み（彼女の笑みを目の当たりにするのは初めてなのですが）、

「この話については、これで結構です。忘れてもかまいません。では、次の機会に……」

とスラスラと言った。

ドアをノックし事務室に入る彼女の姿を見て、ふと思

いました。やはり、ユウナさんは何かを疑っていて、僕がそれに関わっているんじゃないかという疑問があって、私に問おうとしていたようです。私の疑いはそれで晴れたのでしょうか、不思議に満足した顔をしていたようです……

4　エリサ

甘かった。

任務を果たすのは、思ったよりえぐいものだった。

もう、いつまでこの状態を続けるのかわからない。数時間看護してくれたバイオレットさんの姿が目に焼き付き、優しく温かい声は、励ましになる限りだった。

だが、どうすればいいのか？

城の外のベンチに座って、ゴーストタウンと呼ぶべき広い街の中で、温かい風を吸い込み、もっと涼しい風が吸いたいな、と思ってしまった。

夜なのに、涼しい風はどこにもなさそうだ。温かい、鬱陶しい風しか感じ得ない。

それとも、これは自分の体調を反映した感覚に過ぎないのだろう？

わからない。

頭がガンガンする。

心ここになく、暮れはじめた空を睨む。

やや薄暗い、鬱陶しい色をしているのに、美しいと思った。

その時、何か音が聞こえた気がした。足音だ。それに、私が知らない人の足音に聞こえる。

ありえない話だ。外出禁止令の下で、もう住人が自家に籠もって絶対に外に出るはずがない。外に出るのは即座に命を危険に晒す行為だ。そんなことをする理由がどこにもない。

だがしかし。

重い、足音……。

衰えた集中力を動員し、その足音の元に目をやった。

そこに、一人の、2メートルぐらいの背丈の、狭い三つ揃えスーツを身に纏う、黒いショットヘアーの、圧倒的な存在感を持つ男であった。

私がいないかのように、私のすぐ横を通り過ぎた。

そんなふうに無視されたのはちょっと納得いかなくて、いや違う、その明らかに法律違反である行為を前にして黙ってはいられないので、声を荒げ、

「ちょっとまって。お前は誰だ？」

と男を呼び出した。しかし男は振り返らずに進み続けた。

癪に障る。

「おい、お前！　聞こえなかった？　許可なく外に出歩くのは、法律違法行為だ！　逮捕されたくないのなら、すぐに自宅に戻れ。もし神様がそれを知っていれば……」

そして、それは一瞬の出来事であった。

荒い動きで振り向いた男の頭が（ほとんど胴体と頭が繋がっていないかのような、おかしな動きだった）、私を見て、

「神？神と言ったか？　君。現在の神の居場所は、解るのか？」

言いようもないほど遠く、理性に悟られない、狂気の眼差しで私を睨む男。

「神の居場所などは知らないが、その命令が官庁から出た以上、神の意思に該当するものだ。従わないと……」

「それはどうでもいい話だ。私はただ、神を殺しに来ただけだ」

あっさり言って、すぐに興味を失ったかのように、元の方向に戻る、機械のように一方向に進む男。違和感が覚える。

「いや、……おい！」

遠ざかり、小さくなる輪郭。

誰だったのかしら。変な人だったな。

ま、明日でも死体になって棄てられることになるだろう……。

ペストで正気を失った人は多い。無理でもない。無視していい。私は、冷静でいないといけない。冷静に、冷静に……。

第三幕

1　バイオレット

今日はエリサちゃんが死んだ。もしかすると、昨日だったかもしれない。あたしにはわからない。

体調を確認するために個室のドアをノックした時、返事がなかったのは不思議だった。そして、ドアを開けた時、真っ白な髪、真っ白な顔、真っ白な肌や真っ白な瞳があたしを待っていた。

墓掘りをやるあたしにとっては確認することなどない。見るだけですぐに解る。死体だ。

それは、エリサちゃんの死体だった。

現実感があまりなくて、最初はただじっとして考えることすら出来なかった。

そして、理由がわからないまま、泣いてしまった。

あの国にやってきて一年、はじめて、あたしは泣いた。

それでも、何故自分が泣いているのか、あたしにもわからなかった。

怖いというより、悲しい。

何万もの死体を見たのに、この死体だけが心を揺るがせた。

何故だろう？

その何万の死者に対して失礼じゃない？

死体を発見して驚かなかったことにも、複雑な気持ちになる。

あたしは心を見抜くことができたから、黒死病の潜在成長には、誰よりも敏感だった。だからエリサちゃんの心に、黒い何かが生えたのがはっきり見えたんだ。ただ、それはあり得ない話だから、あれは疲労だから、辛いだけだから、と自分を誤魔化した。大量の汗濡れているその顔を見ても、否定したんだ。心の中に、狂った螺旋が現れたのも、気のせいだということにした。

だが、今朝見た死体の全てがやはり唯一無二の真実を知らせた。エリサちゃんが黒死病に死んだ。

あたしは甘かった、弱かった。もっとエリサちゃんの傍にいてあげられれば、もっと真剣に頑張れれば、こんな結末はそもそもなかったはずだ。

でも。もう遅い。私の前に、愛しい人の無表情の、温かさのない、永遠の固化した体が、横たわる。

エリサちゃんに、何かが引っかかているように見えた、最近。ユウナもそうなんだけど、違う気がする。何回も話をしようとしたけど、応じてくれなかった。

でも、あたしは知っている。アルベルトさんを毎日促して、怒りの末に暗黙の答えを得た。やはり、エリサちゃんはこの国出身の人だったんだ。

そして体の具合がこれほどに悪化したのは、伝染病が急速に蔓延しはじめた後のだった。

もしも、もっと早くそれをわかっていれば。エリサちゃんの締めた心を、強引にでも開かせていれば。もしも……。

窓から、晴れた空がはっきり見える。緑色に光る山々が見える。この国の何万の他の人と同じ、太陽のもたらした暖かい、無慈悲な日差しが真っ白な骸を輝かせた。眩しかった。

2　祐奈

目を覚ました時、ぼんやりと晴れた空を確認した。数週間続いた白く曇った空に反して、晴れた日がやってきた。これはつまり、春の訪れだろうか？

ベッドから身を起こすや否や、泣声がはっきり聞こえた。

バイオレットの泣く声だ。その地味で、慈悲を窺わせない、エリサとしか話さない少女。ありえない話だ。あってはならないことだ。

慌てて身を立てて、着替えて、個室の外に走り出した。泣き声の元へ。

この泣き声を説明できる可能性は、ただ一つなのだ。

昔、一年の中では死亡率の一番高い季節は春だったと、何処かで聞いたことがある。

高く広い窓から露わになる、晴れきった空の元に、人間の眩しき、ぼんやりとした輪郭が２つがあった。一つは横になっていた。もう一つは、泣き声を吐き出して、頭を垂れて敷布を目に当てて体全身を震えさせている。

春の風に撫でられた、新年の輝く太陽に照らされるあの二人の体は、世界の不条理さを象徴していた。言うのは嫌だったが、どこかでそれが美しかった。

バイオレットから聞いた話により、エリサの衰弱状態を前から知っていた。私と同じく、なんとエリサもこの国の出身であった事を知った。そして、数日前から、悪化した状態もなんとなく感じて、エリサを慰めようとし

たけれども、やはり一方的に悪化しただけだった。そしていくら話しても、エリサさんは自分の心を開いてくれなさそう。バイオレットは、心を見られる人なのだ。「心を開けてくれる」というのは、つまり、その人の精神的な安定性や、黒死病に罹患する可能性も読めるということだ。

エリサがすごく不安定になっても、墓掘りの人として黒死病にかかって死ぬのは、バイオレットも当然不可能だろうと思って想像すらしなかった。今朝までは。

つまり、その得体の知れないウイルスは成長して、私達墓掘りの人に対しても脅威になったのだ。

もう無職と言ってもいい状況だ。

あれは、問題だ。私達が無敵ではなくなったら、もうお仕事はおしまいだ。

「ねぇ、ユウナさん。何故、エリサさんが死なないといけないのよ?」

「私に聞かれても……」

「エリサちゃん……もしかして、この一年の間に、自分の家族とか友人とかを埋葬したんじゃないかな? 不条理な世界の被害者になって、大規模な、国規模の葬儀に参加して、自分の故郷を葬って……」

バイオレットの眼は悲しさと無意味さのあまりで、何も映っていない。空っぽだ。答えるのも無理だ。ただし、私の安全のために、言わなければいけないことがある。ごめん、バイオレット。エリサも。

「あの、エリサの死体から離れた方がいい。墓掘りの私達にまでも細菌が移られるのなら、触らないほうがいい。葬儀のやり方を後でも考えよう」

「何……何言ってるの? 正気? エリサちゃん、そのまま放っていくつもり?」

「私達の安全のために、体をそのまま放っていかないと。黒死病が新しい段階に達したのなら、感染方法はもうわからない」

「ユウナさんが言っていることはわかっているの! エリサちゃんを置き去りにすると言ってるんでしょ!」

予想通り。大声が出た。喧嘩しないと何もならないみたい。面倒だ。

「置き去りだかなんだかは関係ない! もう死んだんだ! 私達はまだ生きている以上、生き続ける義務がある。いくらこの国、いや、この世界が不条理であっても、それは変わらないんだ! もう危険だから離れよう!」

「イヤだ! エリサちゃんから離れない! 絶対イヤだ!」

話にならない。ちょっとだけ押しのけようかと思ったが、無理だ。微動だにもしない。退くしかない。失敗だ。

暖かくて眩しくて紅色に彩られた初春の部屋に背を向けて、出た。

本当の事を言えば、バイオレットの気持ちがわからないわけではない。

私たち墓掘りには、毎日毎日死体ばかり見て、生き物がすぐに死体と化す過程を何回も何回も経験し、その移りゆく、死にゆく螺旋の中で「個体の部分」に縋り付くことは、精神的に必要なものだから。

言い換えれば、人や生き物は常に自分は死にえないと思うんだ。「私が、死にうる」という概念は、否、「死」という概念そのものは、だいたいの動物には存在しないとされており、「死を恐れる」とはもっと形而上的な概念なので、それを意識すれば「死にうる」と「死にえない」ものに判別を付けないと安心できない。

この国のだいたいの人々は、おそらく「死ぬ」という事を覚悟して、全員が死ぬ運命だとわかっていて、「生きる」を諦めたのだろう。

ただし、私たち墓掘りの人は、それらに比べれば無意識に、もっと「人生」に縋り付いている存在なのだ。

毎日死体を見ていても、「死」を恐れるはずがない。

恐怖が、麻痺されている。死は自然な、体の状態の変化にしかないように見えてしまう。

ただ、それは全部ではない。

「死」ではないというより、原始的な生き物のように「死を考えられない」状態になっただけなのではないか。

つまり、墓掘りの人が死ぬのは、人生の中では見たことがない。今朝は初めてだ。

私達と全世界には、絶対な隔離が発生したんだ。

「世界は死にうるが、私達は死ねない」

そして、「死にうる」ということがありえないことではないとわかっても、その時が迎えるまで考えられないんだ。だって、私たちだけは何があっても死体にならない身なのだから。

死という概念が論外になると、「死」を恐れる必要もない。もともと無いに等しい。その概念すら、思想から消えたと言える。

だがしかし、それは心を守るための手法にしか見えない。普通の人間にとっての「死」に思いがけずもう一度会った時、信じてきたことの全てが崩れて、世界の絶対な無意味さをもう一度認めないといけないんだ。

それに、幼い頃に墓掘りになったのなら、その「死が解る人」と「死がわからない人」の区別をすること自体、

最初からなかったのかもしれない。
バイオレットはそうなのかしら。「エリサ」が「死んだ」ということを、非現実のあまり納得できない。いや、現実ではないことにしようとしているんだ。何もなかったかのように。子供のように。
「死」はもう考える範囲外の概念になったからだ。
とりあえず、事を報告せねば。アルベルトさんにすべてを説明して、対策を求めよう。
多分、仕事は今日で終わり。そうなったらどうしよう？
他の仕事を、知らないから。

結局、どう考えればいいかわからないが、
「状況はわかった。だが今までと同じ、無駄なことに考えず仕事に集中してください」
とただ言われた。つまり、何もなかったようにしてくださいと言っているんだ。
ウイルスが進化してはいないかと主張したんだけど、全部払いのけられた。考えられない、と。やっぱり何かを知っているみたい。シモンは別だが。
エリサの死について、いくら促しても（私は、アルベルトさんと話すのが嫌いではない。バイオレットやエリサと違って、あの人が苦手ではないから。）、
「エリサの死因は、おそらく精神面の負担なのだ。何も疑わずに命令に従えば、何も起こらなかったと言ってもいい。本人が警告されたのに、疑い続けたのは自業自得でしかないことだ。「神」の神秘たる守りは、そういうものだ」
とバラバラな、説明にならない、エセ信仰的な内容の混じったモノローグしか得られなかった。
私はある程度、アルベルトさんが言ったことを信じてはいるが。
ただ、隠し事が多すぎる。
そして、私は自分の安全のために、知りうる限り状況を把握したい。無駄な好奇心ではない。身を守りたいだけだ。
だが、私も一応アルベルトさんを信じたい。今まで、危険な仕事はさせたことがない。無理な命令も、下したことがない。
本心はどこにあるのだろう？　私達も、死ぬ運命なのか？　そうならば、彼はそれを知っているのか？

帰り道で、得体の知れない不安が走った。
誰かが、居る。知らない誰かが。
今まで聞こえなかった足音がする。振り向く。
巨人。帽子を被った微笑む巨人がいる。
誰だ？

ベストを着ているから、おそらくしばらく前からここにいたのだろう。そしてよく見慣れた歩き方をしている。この人は今まで見たことがなかったのに……もしかすると頻繁にここに通う客だったのかしら？
考え事に浸っていると、回廊を歩き回っていたその巨人は、私の存在に気づいて目を向けた。目が合う。
深淵ほど深い瞳。疑いようもなく賢い男だ。そして、その眼差しから漂ってくる感じに圧倒される。眩暈を禁じ得なかった。こいつは一体、誰？
何故ここにいるのだろう？
「君。墓掘りの一人か？」
朗らかで親切な、深い雄々しい声の音質。
だが、無邪気なその笑みに反して、上から見るその態度はどこか凄くムカつく。というより、どこかで不釣り合いすぎるんだ。この人は、何かが異常だ。
「あぁ。然り」
と簡潔に答えた。なんだかわからないが、この人と話すだけで反吐が出る。蛇に睨まれた蛙、という感じ。
「おぉ、君は例のユウナちゃんですか。それとも、『殺し屋』という名のほうがよりふさわしいかな？」
どこから自分の正体を察したのだがわからないが、それよりも誰にその忌々しいあだ名を聞いたのか、ちょっと気になる。
「……まぁ、一応。貴方は誰ですか？　お初にお目にかかりますが」
「儂はドレミエンという名前で知られておる。えぇと、なんて言えばいいのかな？　この国の、偉い人の一人、と言ってもいい」
ちょっと不遜すぎる自己紹介で違和感があったが、とにかく本題を上手く変えた。それでいい。確認したいことがある。
「偉い人と言われても、ドレミエン様の名前は初耳です。この国で何をなさっているのですか？」
「む、複雑な質問です。儂はある意味で、あるたぐいの、『管理者』なのだ。そう。その言い方がいい」
私を無視こそしないが、私を見ないその眼差しは、言葉で表しようがない。どんな世界に住む人なのか、さっぱりわからない。
でも、一つの確信を得た。この人は、何が起きている

のかを知っている。私にしては珍しいが、これは合理的な推測ではなく、ただの勘だ。だからこそ、もっと聞くべきだ。
「ドレミエン様、最近ある村の村人がまるごと死ぬ事例が発生しました。そして最もおかしいのは、半数の死体がそのまま残っているのに、残りの半数の死体が前触れもなく消えて、結局――」
「その人達が死んでいたと、誰が言ったのじゃ？」
真面目な、ちょっとびっくりした表情を露わにする、太い瞼。そして、突然自分が言ったことを遮った、力と自信に溢れた、哲人の声。
「ドレミエン様は知っているのですか？　その人たちは、どうなったのでしょう？」
「いかにも。しかし、それは内密である以上、ここで言えるものではない。ごめんなさいね、ユウナちゃん」
謝る様子からも、正直さと誤魔化しのバランスは測り得ない。ムカつく。この人は、理性を超える存在のようだ。自分の仮設、自分の人に関しての経験を、全部覆す存在なのだ。だが、一応明らかになったこともある。彼は、知っている。そしておそらく、あの人達は「死んでいない」らしい。まぁ、信じていいのかは、まだわからないんだけど。
「そう、ですか。でもそれを聞ければもう十分です。私は安心できます。今まで、皆死んでゆくと思い込んで、とても不安に思っていました。聞きましたか？　うちの墓掘りの中では、一人死者が出ました」
半分しっかりとこちらを見据えつつも、半分どこかの遠くを眺めるようなその目差しが、知らぬ間に暗くなった。
「あぁ、聞いておる。もうアルベルト殿から直接にその話を聞いた。残念だ。エリサちゃんはもう負担が重すぎたので、致し方ないことではある。逆に、早く気が付かなかったことは、私に責任がある。だが、責任を取りたいとは言っても、もう結果は変えられない。死者は、戻らない。エリサちゃんも、この国の数えられない被害者も。だから、このようなケースを繰り返さないように、用意を整えておきます。今は、それぐらいしか言えない。申し訳ない」
とんでもないモノローグを下した、知らない人。まるでやくざの親玉みたいな話し方じゃないか、今のは。
その発言は、さらに、自分の好奇心をそそらせた。
「用意を整えるとは？　どういうことですか？」
「あいにく、それを言うまで自分の力が及ばないのだ。本当に、儂はただただ言えないのだ。だが、言えるときが来る。それまでに……」
帽子を正して、巨漢の体が動き出した。
さっきまであの人は私に注目していたのに、私が消えたかのように、意に介せずどこかに去っていく、静かでせわしい、この世にあらぬ人。
まさに、私は薄い存在だと言わんばかりに。

そして、私がもうその人にとって消えたと思ったその瞬間、
「そういえば、お嬢ちゃん。」
肩越しに語る、巨人のドレミエン。
「君は、儂もアルベルト殿も、疑っているのかね？」
とんでもないことを、あっさり言いあてられた。喉が詰まる。
「おっと、脅かすつもりはない。むしろ……真実を知りたいのかね？」
何？
「真実？」
「この国に起こっていることの、真実。教えてあげよう。ただ、わしの家に行く必要がある。こういうオープンなところで、そんな深刻な話などは出来ない。聞く勇気を、持っているのかね？」

3　シモン

毎日アルベルトさんとの喧嘩ばかり。
この国に起こっている異常なことが、多すぎるんです。アルベルトさんは何かを知っている、それでいて隠しています。僕は、その何かを教えてくれないかと、毎度も聞きましたが、
「君がそれを知るにはまだ早い」
としか答えてくれません。
今、城の内庭にユウナさんと打ち合わせに行く途中です。話がある、と彼女がいいました。鬱陶しい、もうあまり整理されていない、バラバラな状態の庭です。風は温かくて、その死の嵐の中はあまり気持ちいいものではありません。生々しい感じで一杯で、空気が重くなるにつれて、満開のマロニエの花が舞う中、それは春と一緒に来たる死を告げる絶景にほかなりません。
ベンチに座るユウナさんが、いました。本を読んでいます。そういえば、いつも本を読んでいるみたいです。それは時々、話題のきっかけになったんです。彼女も僕も、ノンフィクションやエセーなどしか読まない傾向があるのですが、僕は歴史と経済の本をいっぱい読んでいるのに反して、彼女は人の伝記や精神学に関するものを

好んでいるらしいです。
どうでもいい話ですけど。
僕が近づいているのを気がづいて、本を締めてこっちに見ました。カーバーを見ようとしましたが、見られなかったです。珍しく、小説みたいでした。それに、古そうなもの。どんな小説でしょうか？
「やあ」
簡潔な、彼女の挨拶。長い話を好まない性格なのは、今までよくわかりました。
一週間前、仲間のエリサさんが死んだことは大変なショックだったと思います。それ以来、彼女と話す機会はあまりなかったのですが。なぜわざわざ僕を呼んだのでしょうか？
「シモンさん。単刀直入に言います。あなた、この国に起こっていることが、変だとは思わない？」
突然でした。
「えぇ？　まぁ、国の住人がまるごとに消えたり死んだりするのは、普通じゃないと思いますが……」
「いや、それだけではありません。アルベルトさんとその周りを、信用できますか？」
それは、一番聞かれたくない質問です。正直には言えないですが、エリサさんの死を聞いてから、僕も心配のあまり黙っていられないのです。
「信用しているかどうかは何とも言えませんが、いくつかの疑問を抱いているのは事実です」
「そうですか。となると、意見は合ってそう。私も、アルベルトさんをあまり信用していないですが、あの人が悪いことをしようとしているとは思わない。それに、ドレミエンという人物は、知っていますか？」
「会ったことがあります。あの変なお爺さんですか？」
「あぁ。その人。誰だか知っています？」
「知りません。頻繁にアルベルトさんを訪ねてくることぐらいしか」
「そう。私の、ただの仮設ですけど。あの人、あの国の真の支配者の一人です」
「えぇ？」
とんでもない話になってきました。
「あの人に誘われて、全部知っていると言われたのですが……信用すべきかどうかわかりません。ただ、私はあなただけは、疑っていないです。何かの企みがあったとしても、あなたが関係ないことはもう確認済みです。だから、証言者になってほしい。私に何があったら、他の皆に真実をいってください。よろしいですか？」
いきなり聞かれて、あまり何かを答えばいいのかわかりませんでした。わけがわからないところが多すぎます。胡散臭いところもいっぱいあります。
「その代わりに、私があの人から聞いたことは、全部、教えてあげます。どうですか？　協力してくれますか？」
当然、そのつもりでした。でもその前に……。
「まるで行ったら危険だという風に聞こえますが、あの人はユウナさんになにか危害を加えるつもりではないと思いますよ」
「私もそう思いますが、念の為です。それに、私だけが知っているのは駄目です。あいにく、バイオレットさんは証言者にならない状態なんです……」
「えぇ、聞きました……」
エリサさんが死んだ時、バイオレットさんは狂気になって、動けなくなったらしいです。また、すごい量の汗が出て、呼吸が荒くなって、エリサさんと同じ症候を見せ始めたそうです。ユウナさん曰く、ウイルスが進化して墓掘りの人にとっても危険な存在になったようです。そして、バイオレットさんが一日中エリサの死体に縋り付いていたせいで、細菌が感染ったんじゃないか、という仮設を立てていました。
それなのに、ユウナさんに、今までと同じ使命を果たせ、とアルベルトさんは無神経に言ったようです。確かに、死者はまだ大量に出ています。数は全然減っていません。
ただ幸いにも、翌日に「アキアサ・ユウナなる人物に関して、本日から許可を取らず外出することは禁止する」、という本部の直接命令が出たらしいです。確かに、あのお爺さんがユウナさんを誘ったという話が事実だとしたら、どこかで筋が通ります。
その時以来、エリサさんの死体は忌むべきものとして扱われ、一切運びだされませんでした。命令されてもユウナさんが拒むだろうと判断されていたので、そのままで残りました。ユウナさんの個室が司令室に近いところに代えられたのも、同じ理由なのです。あくまで、時々バイオレットの看護をするぐらいはできると本人がいったようです。
しかし、バイオレットさんももう遅いと考えざるを得ない。
辛い時間です。でも、じっとしていられないのも事実です。
だから、当然ながら、提案を躊躇わずに受け取りました。
人間としてのプライドに関わる問題です。

絶対に絶対に、知りたいからです。ユウナさんと約束して、この国の真実を知りたいんです。

ユウナさんは今夜ドレミエンさんの家に行って、翌朝ここで合流して全部話してくれるという約束になりました。

そして、自分の個室に帰る途中で、

「あぁ、シモンさん。アルベルトさんが呼んでいるよ」

と、顔ぐらいしか知らない役所の人から言われました。

アルベルトさんが僕に会いたいって？　何の用があるのでしょう？

最終幕

1　ドレミエン

「君は、因果応報という概念を信じておるかね？」

今日、偶然に（そんなものがあるとしたら）会ったシモン殿にこう述べた。

「私にはわかりません。一応、神の筋道がこの世にはあるぐらい、わかります。でもその筋道は何で出来ているのでしょうか。科学的にも宗教学的にも、知れたことではないと聞きました」

素直な人だ。

「あぁ、たしかにね。災いをもたらした人々が、必ず報いを受けるわけではない。もちろん、それも人の責任の重さによる話だが。多分、一つの人の責任が重ければ重いほど、それなりの報いがあるのだろう。それでも、八つ当たりになってしまうことは、有り得ない話ではない。そんなことを、時々、思うことがある」

「え、ええ。おっしゃる通りで……」

やはり、素直な人だ。さすがは教会のトップ大学の人間だ。

この世界は、終わっている。「神（自然）」がそう決めたのだ。これは傲慢ではなく、ただの報い……かもしれない。

神が犯した罪は、いずれ報われないといけないと思う。

苦しんだ人間の手で。

それでいい。

私も、罪をたくさん犯したその一人なのだ。
あの若いお嬢さんもまた、罪人なのだ。同類なのだ。
色々な話を聞いた。苦しんでいる、黒死病に侵された子供たちを、容赦なく殺すその姿について。どの国でも話題になったようだ。ここの修羅場なら尚更だ。子供は熱い感情にあふれているので、黒死病に罹りやすい存在だ。
何故そんなことをできるのかと聞かれたところ、「しょせん死ぬでしょう？　逆に苦しんでいる子供を殺せないと言っている弱者は、より罪深い、慈悲のない人たちなんです」と答えたらしい。
それは理性から考えれば、ご尤も。彼女は正解を出した。殺さない人たちは、しょせん弱者なのだ。
そして、儂もまたその然り。
だから、自分の罪を、誰かに懺悔したい。残された時間で全ては語れないが、その中には特に知らせたいものがある。
全部が終わる前に。

暗い、長い部屋の中で、ダイニングテーブルを見渡す。
そもそも客を迎えるべきテーブルだったはずだが、数年の間、ほとんど誰も迎えることはなかった。
それも、報いなのだろうか。

突然、物騒な音が聞こえた。ドスンという、何かが砕かれたような音。そして、ものすごい地響きが起こった。
音の原因は、背中にある。そっと、静かに振り向く。
ドアの狭間に、一人、背中の高い人の輪郭が見える。外からの淡い光はその輪郭をぼやかし、よく見えない。何かを手に持っているようだ。
一歩して前に進んだ。
手にとっているそれは道具でも武器でもなく、人の死体であった。
よく区別できない、血にまみれた死体。
また、一歩前。
人の体が、次第に見えるようになる。狭いスーツを着ている。髪がショートの、痩せた男だ。
更に、一歩前。
輪郭はもう完全に明確になり、顔を見ることができる。嘲笑う、慈悲のない、狂人の顔。眼には何も映っていない、人を見ざる、希望を見ざる、自分を見ざる、愛情を見ざる、イデオロギーしか見えぬ双眸。
「お。この人、お前の友達だったっけ？」
傲慢不遜な態度で、上から目線で話す、変わった声で死体を前に持ち上げる男が言う。ニッコリしながら。

しょせん、懺悔するまでも、許されてはいないようだ。

「だから私は、神を殺しに参りました」

2　シモン

真夜中。
虫の音すらも聞こえない、完全な静かさ。不安になるほど。
その静かさが次第に人間の忙しい、動揺の色がする声で満たされたことから、更に不安になりました。
数分前に、警報が鳴りました。この節約主義の国で、堂々と電気を使う音が聞こえるのはとても久しぶりでした。別時代に生きている気がすることすらありました。
城の内庭に集まれ、と。
ユウナさんには、警報が聞こえたでしょうか？　それとも、もう遠いのでしょうか？
アルベルトさんを訪ねた時、簡潔に「もう、今日の仕事は中止しろ。休憩をとってくれ。これは命令だ」とだけいわれました。何故そんなことを言うためにわざわざ僕を呼んだのでしょうか？　今日のお仕事の終わりを待ってもよかったのではないでしょうか？
妙な男です。でも、ユウナさんが気に入っているのもなんとなくわかります。変なこだわりがある人ですけど、忠実な男です。しかも、物知りです。
暗闇の中で舞うマロニエの花。
庭の中では、様々な人たちが集まっているようです。案の定、墓掘りさんたちはここにいません。来たいとしても、来られないのでしょう。
５０人ぐらいの人が集まりました。以前から城が寂しいと思っていましたが、この人数だけで城や国が機能したのだと考えると、ちょっと驚きます。やはり人が少ないです。
そういえば、今の警報音はユウナさんと関係があるのでしょうか？
最近、ユウナさんの事をよく考えます。無理もない。他の親しい人は、ここにはないからです。
でも、今日の夕方のことを考えると、ちょっと気になります。
待機しているのは、退屈です。気まぐれを探そうかと思いましたが、当然何も持ってきていませんでした。本でも持ってくればよかったです。

本？　あ、そういえば、さっきベンチでユウナさんが本を読んでいましたっけ。結局、何の本か確認できませんでしたが。

例のベンチに近づくと、もう二人の役員がここに座っていました。駄目だ。流石に本がここにあるわけが……。

あ。

ベンチの下に、草に混ざって、一冊の本がありました。外見もぴったりです。これがユウナさんの本でしょうか？

本を持ち上げました。「異邦人」と書いてあります。なんか、どこかに聞いたことがある本です。

読んでみようかな？

最初の段落には、

『今日、ママが死んだ。もしかすると昨日かもしれないが、私にはわからない』

と書いてありました。変な言い方だ。何故ユウナさんがそんな本を読んでいたのでしょう？

そして、読んでいる途中、

「諸君、来てくれてありがとう。これから非常に大事な話をせねばならない。よく聞いてください」

アルベルトさんの声が、庭の中に響いて、喧騒を遮ったのです。

「諸君が知っている通り、この国は極めて異常な状態の下にありました。史上最も深刻な黒死病のパンデミックを抑えるべく、教会組織、国連軍や政治機関の本部が力を合わせました。諸君らはここに来て、毎日、英雄のごとく黒死病と戦ってくれましたね。このことについては、感謝の言葉もありません。よくやった。一旦、伝染が抑えられたのも、他国に広がったりしなかったのも、諸君の努力のおかげです。……この異常な状況の下で、上官としての務めを果たせた私は、こんなに優れた人に囲まれていたと思えば、光栄です」

今まで暗記したテキストを読んでいるみたいなアルベルトさんが、一つのシートを取り、読みはじめた。

「では、今から本題です。

本日から、諸君は自分の努めから開放され、自分の国に、そして元の務めに戻ることになります。戦いが、終わりました。この国で出来ることは全部、力を尽くして完遂されたのです。これ以上長く残るのは愚行に他なりません。この国から、朝5時から、総員の撤退を命じます。以上です」

何？なになになに？

ここから、撤退するだと？　ここから逃げる、ということでしょう。これほどに頑張ったのに？　まだ数千以上の命を救えるかもしれないのに？

「ちょっとまって！　この国には、まだ凡そ数千の人が残されることになります！　それに、『消失ケース』は依然として解決されていません！　失礼ながら、それは……」

「黙れ。確か君は、中央大学から派遣された、シモン・エヴェント研修員でしたね？　まだ若いはずだ。どこに就職する気か、それは私の知ったことではないが、教会であれ政治機関であれ、もしくは軍隊であれ、命令というものは必要な存在だ。社会とは、そういうものだ」

叫び続ける僕を無視し、アルベルトさんが庭から出て、騒ぎの中で不満を言うのは僕だけとなった。誰も、話しかけてこなかった。何故なら、個人的に知っている人が一人も居なかったからだ。慰める人も、一人も居なかった。

皆、この地獄から脱出できるのは、幸せだから。早く、支度したいという気持ちで、場所を去っていく。

あっという間に、一人で嘆く僕だけが残された。

ユウナさんは、大丈夫なのだろうか？

この国には、何が起こったのか？

まだ、答えのない質問は、いっぱい残るのに。

何故人間たちは、そんな不条理な目に合わないといけないのです？

神の命令であれ人間の命令であれ、その欺瞞には何の意味があるのでしょうか？

8　バイオレット

素敵な、ガラスで出来ている城の中にあたしはいる。

不思議なことに、いつもなら薄い色がしている自分の髪が妙に光って、不可思議な、濃い紫色に彩られている。

そして、いつもより2倍ほど長い。足まで垂れているその様子を、美しいと思った。

ガラスで出来ている城の中を、隈なく歩き回った。透明な壁には、時々壁と同じサイズしている大きいな枠付き絵がついている。色々な顔が、絵の中に描かれている。若者も、老人も、中年の人も、女性や男性、子供、子供たくさん、赤ちゃん……

透明な壁の向こうに、他の壁があって、そして他の壁、そして更に無限に続いている他の壁がある。でも、壁ずつに色々な絵がかかっているから、水平線ははっきりと見えない。絵だらけだ！

ただ、透明な天井から空だけが見える。今は、暖かい、星いっぱいの世界だ。

階段を必死に探して、天井まで登っていった。

登った！　白く輝く城の床に、足をすべらせ、柔らかい何かに転んだ。

寝転んでいた。気持ち、いい。

横臥のポーズになって、それを見上げる。いい匂いがする。

私、素敵な花たちに囲まれているんだ。スミレ、チュリップ、デイジー、ヒヤシンス……いっぱい、いっぱい！

そして、花たちの花びらが立ち上がり、空に舞いはじめた。私のために踊ってくれるのかな？　私も、一緒に踊りたい！

突然、視線を感じた。

凄く、懐かしい、暖かい、親しい、愛しい視線を感じた。

振り向くと、様々な、眩しく輝く花たちが空に舞う。

私を見ている気がする。

そして、その花たちが作る輪の中には、一人の面影。

エリサちゃん、だった。

輝く、真っ白な、色の失せた身体は花たちの鮮やかな香りで彩られている。美しい体だ。

私は、彼女へ走り出して、香る結晶の涙を泣きながら力いっぱい抱きしめた。

そして、長い、長い、花で充ちられた、香り高い夜の果てまで、彼女と踊り続けた。

終幕

エピローグ

誰も居なかった。

隈なく城を探ったわけだが、けっきょく人は居なかった。

騙されたかと思ったが、帰り道の途中でもっと不自然な事に気がついた。

音が、一切ない。

外に歩く人ならいざしらず、微妙な、耳をすませば聴こえる、微かな、生きている人のわずかな証も、夜の中で響く小鳥の消えてゆく小唄も、密かな虫の長く続く鳴き声も、聴くことは出来ない。

聴力には自信がある。間違えない。

この世から、音が完全に消えた。完全な、ありえない、絶対の沈黙が支配する。

その時、解った。

ついに、この国は、この世界は、完全に無人となったのだ。

からっぽになった。

村にも、城にも、人が居た跡は一切消えた。全てが夢であったかのように。

だが、一つだけ、確認したいことがあった。

日が登る。ぼんやりした早朝の淡い、優しい光に照らされた、東塔の最上にある、一つのベッド。

その中には、

手を握って、微笑む二人の女性の、ヒヤシンスのいい匂いがする屍がいた。